

## 刊行にあたって

「バブル崩壊」という経済的な事件が、日本で一九九〇年近辺に起こりました。一九四五年に第二次世界大戦に敗戦した日本は、戦後の復興から、約半世紀にわたる経済成長をとげましたが、「バブル崩壊」は「高度経済成長」から続いていた日本の右肩上がりの時代の終わりを告げるものでした。

それ以降、日本では「失われた三十年」とも言われる沈滞の時代が続いています。

「一億総中流」と呼ばれ、がんばれば誰もが豊かになれると信じられた社会から、貧困率が上昇し続ける「格差社会」へと、日本の社会は姿を変えつつあります。子どもたちの生活においても、「7人に1人」が貧困であると言われています。

貧困は子どもたちから教育の機会を奪います。子どもが成長して親になったときに、教育の不足ゆえに低い収入で働き続けることを受け入れざるを得なかったとすれば、その次の世代の子どもも、また貧困に苦しみ、十分な教育から遠ざけられかねません。これは「貧困の連鎖」「格差の連鎖」と呼ばれています。

また、教育の不足で十分な収入が得られないために、不本意ながら結婚や出産をあきらめる人たちもいることでしょう。青年の貧困は「少子化」の大きな原因のひとつともなっています。

こういった悪循環は、日本の現在の大人である私たちが作りだしたものであり、子どもたちには何の責任もありません。この悪循環を止めるにはいろいろな方法があるかと思いますが、「高齢化」が進行し、福祉にますます財源が必要になる中でも、貧しさの原因で子どもが学びをあきらめるような社会をつくってはならないと、私たちは考えています。

『フロンライン参考書・問題集（税別500円）』／『フロンライン電子参考書・電子問題集（税別200円）』は、未来を担う日本の子どもたちが安くても良質な参考書・問題集を手に入れるようにとの思いで刊行しました。この理念に賛同してくれた著者の先生や、制作会社、印刷会社の人たちのおかげで、このシリーズを刊行することができました。

子どもたちよ、どうか「学びを、あきらめない」でください。このシリーズが子どもたちの役に立つことを祈っています。

二〇二二年一〇月二七日 日栄社編集部

# もくじ

## 小6国語参考書

第1章	ことばと漢字	4
第2章	文法	46
第3章	古典	96
第4章	説明的文章	144
第5章	随筆 <small>ずいひつ</small>	172
第6章	物語	198
第7章	詩	232
確認問題	解答 <small>かいとう</small>	242

# 1 かなづかいと送りがない

## ○かなづかい

私たちがふだん使っている「現代かなづかい」は原則として、発音の通りに、かなで表記します。ただし、以下に挙げるものについては注意が必要です。

- 1 助詞「を」「へ」「は」「は、発音は「オ・エ・ワ」だが、「を」「へ」「は」と表記する。

(例) ぼくは君を公園へ連れていく。

- 2 「ジ・チ・ズ・ズ・ジ」については、次のようなきまりがある。

①原則的には「ぢ」「ぢ」「ぢ」は用いず、「じ」「ず」で表記する。

(例) 味わう(あじわう) 短い(みじかい) 預ける(あずける)

②二つの語が連合したために「ち・つ」がにごる場合は、そのまま「ち・づ」と表記する。

(例) はな+ち=鼻血(はなぢ) そこ+ちから=底力(そこぢから)

おや+つれ=親子連れ(おやこづれ)

③「ち・つ」が続いているためににごる場合にも、そのまま「ち・づ」と表記する。

(例) 縮む(ちぢむ) 続く(つづく) 綴る(つづる)

### 3 「オー・コー・ソー」などオ段の長音(長くのばす音)には、次のようなきまりがある。

①原則的には「おう・こう・そう」と「う」を使って表記する。

(例) 公園(こうえん) 扇(おうぎ) 掃除(そうじ)  
王様(おうさま)

②次のような場合には「っ」を用いず、「お」で表記する。

(例) 大きい(おおきい) 氷(こおり) 十(とお) 通る(とおる)

4 次のような場合には、「え」を用いず、「い」で表記する。

(例) とけい (時計)    せいかつ (生活)

### ○送りがな

「歩かない」「歩きます」というように、後ろに続く語（この例では「ない」「ます」）に従って、**語の形が変化すること**（この例では「歩か」「歩き」を、「活用」といいます。活用する語の中で、形が変わる部分（この例では「か」「き」）を「**活用語尾**」、形が変わらない部分（この例では「歩」）を「**語幹**」といいます。

(例) 動詞「動く」……うご (語幹) + く (活用語尾)

形容詞「古い」……ふる (語幹) + い (活用語尾)

形容動詞「正確だ」……せいかく (語幹) + だ (活用語尾)

動詞・形容詞・形容動詞の活用と送りがなの関係には、次のような原則があります。

1 動詞・形容詞・形容動詞を漢字で表記する場合、送りがなは活用語尾から送るのが原則である。

2 ただし、「新しい」「楽しい」など「しい」「い」で終わる形容詞は「し」「か」ら、「静かだ」「和やかだ」「朗らかだ」など「か」「やか」「らか」のつく形容動詞はその部分から送る。

(例) ※——線部は活用語尾

動か／ない・動き／ます・動く・動け／ば・動こ／う (動詞)

古かろ／う・古かつ／た・古く・古い・古けれ／ば (形容詞)

新しかろ／う・新しかつ／た・新しく・新しい・新しけれ／ば

(形容詞)

正確だろ／う・正確で・正確に・正確だ・正確なら／ば

(形容動詞)

静かだろ／う・静かで・静かに・静かだ・静かなら／ば

(形容動詞)

**1** 次の文中にかなづかいの誤りが五つあります。文節単位でぬき出し、正しく書き直しましょう。

きょうは北海道のおぢさんが、五年ぶりに来られるというので、朝からみんなでへやのそおじをしたり、ごちそうを作ったりして、準備をしました。午後、兄と二人で、駅えむかえにいきました。しばらくして、列車は予定どおり着きました。他の乗客につづいて列車から降りてきます。

**2** 次のことばをすべてひらがなで書きましょう。

- ① 王子
- ② 地震
- ③ 多い
- ④ 地図
- ⑤ 凶画
- ⑥ 遠浅
- ⑦ 三日月
- ⑧ 地面
- ⑨ 悪知恵
- ⑩ 底力
- ⑪ 身近
- ⑫ 夕方
- ⑬ 小包
- ⑭ 湯飲み茶わん
- ⑮ 五十歩百歩
- ⑯ 遠い

参考

文節

「きょうはネ」「北海道のネ」と、「ネ」を付けて区切ることができる最小単位が「一文節」です。文法的に正しく定義すると「一文節＝一つの自立語（＋一つ以上の付属語）」となります。くわしくは、第2章の「10 品詞分類」であつかいます。

**3** 次のことばを、漢字二字とひらがなを使って書きましよう。

- ① とりかこむ
- ② つけたす
- ③ つつりかわり
- ④ まちどおしい
- ⑤ おちば
- ⑥ いきもの
- ⑦ いりえ
- ⑧ おしえご
- ⑨ ききぐるしい
- ⑩ あめあがり
- ⑪ ながびく
- ⑫ あゆみより
- ⑬ つしろすがた

**4** 次の漢字の訓読みを、必要なら送りがなをつけて、それぞれ三通りずつ書きましよう。

- ① 冷
- ② 交
- ③ 明



# 3

## 熟語じゅくごの読み方と漢字の成り立ち

### ○漢字の読み方の原則

漢字には音読みと訓読みがあり、それぞれ、次のような原則があります。

●原則1 音読みの漢字 中国伝来の漢字に、中国式の発音をまねた発音をあてはめたものなので、その漢字一字の発音を聞いただけでは、意味がわかりづらい。

●原則2 訓読みの漢字 中国伝来の漢字に、もともと日本で使われていた発音をあてはめたものなので、その漢字一字の発音を聞いただけでも、おおむね意味がわかる。

## ○二字熟語ごふごふの読み方

漢字の読み方には音読みと訓読みがありますので、二字熟語の読み方は、以下の四通りとなります。

①音・音読み (例) 存在ぞんざい・現象げんしょう・相談さうだん・賃借ちんしゃく・読書よみか・漢字

②訓・訓読み (例) 物置もの置き・書留かきとめ・米俵こめだわら・星空ほしぞら・朝日あさひ・手先てさき

③音・訓読み (重箱読みいびりよみ) (例) 仕事しごと・素足すあし・出立しゅつだつ・本場ほんば・味方あじかた・番組ばんぐみ

④訓・音読み (湯桶読みゆづかみ) (例) 手本てほん・夕刊ゆふかん・消印しょういん・指図さしず・身分みぶん・場所ばしょ

## ○例外的な読み方

音読み・訓読みの原則からすると、わかりにくい例を挙げます。

例題…次の熟語は、音・音読み、訓・訓読み、重箱読み（音・訓読み）、

湯桶読み（訓・音読み）のうち、どれが当てはまりますか。

- |   |    |   |    |   |    |   |    |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 王様 | 2 | 野原 | 3 | 茶畑 | 4 | 荷物 |
| 5 | 絵本 | 6 | 役場 | 7 | 肉屋 |   |    |

●例外1 音読みとまちがえやすいが、実は訓読みの漢字

例えば、7の「肉屋」の「屋」は、「や」と聞いてもすぐにはわからないので、原則に従えば音読みになりそうですが、実は訓読みです。「屋」にはもう一つ「オク」という読み方があり、こちらが音読みです。2の「野」は、「の」が訓読み、「ヤ」が音読みです。4の「荷」は「に」が訓で「カ」が音、6の「場」は「ば」が訓で「ジョウ」が音です。

●例外2 訓読みとまちがえやすいが、実は音読みの漢字

その漢字一字の発音を聞いただけで意味がわかるのに、音読みだという場合もあります。1の王（オウ）、3の茶（チャ）、6の役（ヤク）、7の肉（ニク）は全て音読みで、これらの漢字には音読みしかありません。

参考

例題の解答

- 1 重箱読み。
- 2 訓・訓読み。
- 3 重箱読み。
- 4 湯桶読み。
- 5 音・音読み。
- 6 重箱読み。
- 7 重箱読み。

5の「絵本」は要注意で、実は「エ」も「ホン」も音読みです。「絵」は「カイ」も音読み。「本」の訓読みは「もと」です。

●例外3 二重読みができる熟語

ごくまれに、「音・音読み」もできるし「訓・訓読み」もできる、二重読みのできる熟語があります。「音・音読み」する場合と「訓・訓読み」する場合とで、微妙にびみょうニュアンスが変わることもあります。

(例) 父母 (フボ・ちちはは)

上下 (ジョウゲ・うえした)

音色 (オンシヨク・ねいろ)

草木 (ソウモク・くさき)

1 次の漢字のそれぞれの読みが音読みか訓読みかを答えましょう。

- |          |          |
|----------|----------|
| ① 間 (ま)  | ② 服 (ふく) |
| ③ 身 (み)  | ④ 肉 (にく) |
| ⑤ 代 (よ)  | ⑥ 枚 (まい) |
| ⑦ 番 (ばん) | ⑧ 茶 (ちや) |
| ⑨ 値 (ね)  | ⑩ 毒 (どく) |

2 次の熟語はそれぞれア「音・音読み」イ「訓・訓読み」ウ「重箱読み」

エ「湯桶読み」のどれに当たりますか。

- |      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| ① 朝日 | ② 素足 | ③ 貸借 | ④ 消印 |
| ⑤ 書留 | ⑥ 存在 | ⑦ 手先 | ⑧ 印象 |
| ⑨ 物置 | ⑩ 王様 | ⑪ 読書 | ⑫ 味方 |
| ⑬ 本場 | ⑭ 指図 | ⑮ 星空 | ⑯ 台所 |
| ⑰ 相談 | ⑱ 米俵 | ⑲ 夕刊 | ⑳ 漢字 |

3 次の漢字の読みがなを書きましょう。

- |       |       |      |
|-------|-------|------|
| ① 絵筆  | ② 布地  | ③ 宿場 |
| ④ 後手  | ⑤ 急場  | ⑥ 気心 |
| ⑦ 素顔  | ⑧ 反物  | ⑨ 頭取 |
| ⑩ 人質  | ⑪ 野天  | ⑫ 指凶 |
| ⑬ 組曲  | ⑭ 上役  | ⑮ 厚地 |
| ⑯ 合凶  | ⑰ 納屋  | ⑱ 海原 |
| ⑲ 笑顔  | ⑳ 女神  | ㉑ 神楽 |
| ㉒ 若人  | ㉓ 八百屋 | ㉔ 砂利 |
| ㉕ 素人  | ㉖ 師走  | ㉗ 太刀 |
| ㉘ 最寄り | ㉙ 仮病  |      |

# 5

## 反対語と同義語

反対語・同義語は、試験では選択式せんたくで問われることも多いですが、主要なものは漢字で書けるようにしましょう。

### ○中級編の反対語

- |    |                          |   |                        |
|----|--------------------------|---|------------------------|
| 1  | 原則                       | ⇄ | 例外                     |
| 2  | 原因                       | ⇄ | 結果                     |
| 3  | 原料                       | ⇄ | 製品                     |
| 4  | 直接                       | ⇄ | 間接                     |
| 5  | 生産                       | ⇄ | 消費                     |
| 6  | 建設                       | ⇄ | 破壊 <small>はかい</small>  |
| 7  | 許可                       | ⇄ | 禁止                     |
| 8  | 単純 <small>たんじゆん</small>  | ⇄ | 複雑                     |
| 9  | 収入 <small>しゆうにゆう</small> | ⇄ | 支出                     |
| 10 | 精神                       | ⇄ | 肉体                     |
| 11 | 理想                       | ⇄ | 現実                     |
| 12 | 容易                       | ⇄ | 困難 <small>こんなん</small> |
| 13 | 勝利                       | ⇄ | 敗北                     |
| 14 | 全体                       | ⇄ | 部分                     |
| 15 | 全部                       | ⇄ | 一部                     |

### ○上級編の反対語

1	積極	↓	消極		
4	絶対	↕	相対		
7	形式	↕	内容		
10	感情	↕	理性		
				8	義務
				↕	権利
				9	具体
				↕	抽象
				5	偶然
				↕	必然
				6	需要
				↕	供給
				3	主観
				↕	客観
				2	楽観
				↕	悲観

1 「積極」は自分からすすんで行うこと。「反対は「消極」。

2 「楽観」は物事を前向きに明るくとらえること。「反対は「悲観」。

3 「主観」はものを見る側で、「客観」は見られる側。もしくは、「主観」はひとりだけの見方や考えで、「客観」は人々の間で一致する見方や考え。

4 「絶対」は、他と比較することができないもの。「相対」は、他との比較によって成り立つもの。

5 「偶然」は、たまたま起きること。「必然」は、必ず起きると決まっています。

6 「需要」は商品を買いたいという欲求。「供給」は売るために商品を出している。



7 「形式」は外から見たときの形。「内容」はその中味。

8 「義務」は、行わねばならないこと。「権利」は、行う自由をみとめられていくこと。

9 「具体」は、目に見える一つ一つの事物。「抽象」は、一つ一つの事物に共通する性質を引き出して、ひとまとめにしたもの。

10 「感情」は、喜怒哀楽きせとあいつくのような心の動き。「理性」は筋道すじみちを立てて思考する頭の働き。

### ○主な同義語

1 短所・欠点

2 長所・美点

3 興味・関心

4 方法・手段しゅだん

5 心配・不安

6 体験・経験

7 著名ちよめい・有名

8 主要・重要

9 一生・終生しゆせい

10 完全・無欠

11 納得なっとく・承知しょうち

12 原始・未開

13 立身・出世

14 手紙・書面

15 消息しようそく・音信

※同義語は、意味が完全に一致いっちしているとは限らないので、注意が必要で  
す。

1 ①～⑮の熟語の反対語を、あとの漢字を組み合わせて作りましょう。

- |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|
| ① 近海 | ② 延長 | ③ 解散 | ④ 権利 | ⑤ 上昇 |
| ⑥ 華美 | ⑦ 空想 | ⑧ 過去 | ⑨ 成功 | ⑩ 減少 |
| ⑪ 差別 | ⑫ 混乱 | ⑬ 原因 | ⑭ 損失 | ⑮ 加熱 |
- 
- |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 義増 | 平等 | 来素 | 現利 | 実下 |
| 集平 | 秩集 | 降遠 | 失果 | 短合 |
| 却却 | 結結 | 敗冷 | 加序 | 洋務 |
| 質質 | 縮縮 | 未未 |    |    |

2 次の熟語とよく似た意味の熟語を、それぞれア～エから選びましょう。

- |      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| ① 日常 | ② 改良 | ③ 忠言 | ④ 修正 |
| ア 平素 | ア 良好 | ア 宣言 | ア 改正 |
| イ 日時 | イ 革命 | イ 無言 | イ 正直 |
| ウ 日用 | ウ 改善 | ウ 忠告 | ウ 厳正 |
| エ 非常 | エ 改札 | エ 忠実 | エ 正確 |

参考

華美

はなやかで美しいこと。  
ぜいたくなこと。

# 6

## 四字熟語じゅうじくご

四字熟語じゅうじくごは、まず読み方を覚えて、次に意味を頭に入れましょう。ふだんの生活の中で耳にしたとき、そのつど意味を調べるように心がけると、自然と覚えることができます。中国から伝わった故事成語こじせいごや、慣用句かんようくのよ  
うに使われるものもあります。

### ○主要な四字熟語

- 以心伝心(いしんでんしん) 〓何も言わずに気持ちが相手に伝わる
- 自画自賛(じがじざん) 〓自分で自分をほめる
- 呉越同舟(ごえつどうしゅう) 〓仲の悪いものどつしが一緒いっしょになる
- 自業自得(じうごうじとく) 〓自分でしたことの報いを受ける
- 異口同音(いくぐわうおん) 〓いっせいに同じことを言う

一朝一タ (いっちょういっせき) Ⅱ 短い間

我田引水 (がでんいんすい) Ⅱ 自分の利益のためだけにする

臨機応変 (りんきおうへん) Ⅱ その場に応じた適当な処置しよち

八方美人 (はっほうびじん) Ⅱ 誰だれに対しても愛想がいい

一挙兩得 (いっきよりようとく)・

一石二鳥 (いっせきにちよう) Ⅱ 一つで二つの利益を得る

単刀直入 (たんとうちよくにゆう) Ⅱ まず重要なことを切り出す

一日千秋 (いちじつせんしゅう) Ⅱ 待ち遠しい

本末転倒 (ほんまつてんとう) Ⅱ 大事なことと大事でないことをとりち

がえる

大同小異 (だいどうしょうい) Ⅱ 大体同じだが少し違ちがう

喜怒哀楽 (きどあいらく) Ⅱ 人の感情のすべて

針小棒大 (しんしょうぼうだい) Ⅱ 小さな事を大げさに言う

意気投合 (いきとうごう) Ⅱ 互たがいに気が合い心が通じる

一心不乱 (いっしんふらん) Ⅱ 何も考えず一つのことに集中する

花鳥風月 (かちょうふうげつ) Ⅱ 自然の美しさ、風流さ

#### 参考

#### 一日千秋

「千秋」は千年という意味で、「一日千秋」は、一日が千年のように長く思われること。そのくらい待ちこがれている、強い思いを表現します。「一日千秋」ともいいます。

七転八起 (しちてんはつき) || 何回失敗しても立ち向かう

言語道断 (ごんごどうだん) || 言いようもなくひどい、とんでもない

十人十色 (じゅうにんといろ) || 人の考えや好みは様々

馬耳東風 (ばじとうふう) || 何を言われても感じない

半信半疑 (はんしんはんぎ) || うそか本当か信じられない

油断大敵 (ゆだんたいてき) || うっかり気をゆるすと大失敗

竜頭蛇尾 (りゅうとうだび) || 初めは勢いよかったが尻すぼみ

付和雷同 (ふわらいどう) || 自分の考えがなく、人の考えに軽々しく同

調する

不言実行 (ふげんじっこう) || だまってやることをやる

無我夢中 (むがむちゅう) || 我を忘れて何かに熱中する

## 参考

### 七転八起

「七転び八起き」と訓読みして使うことも多いです。

### 馬耳東風

ここちよい春風が馬の耳をふきぬけても、馬は何の感動も示さない、という、李白の漢詩に登場する表現に由来しています。

### 付和雷同

「付和」も「雷同」も、自分の考えがなく、他人の考えに軽々しく従ってしまうことを意味します。「不和雷同」はまちがいですから、注意しましょう。

1 次の四字熟語の読み方をひらがなで答え、その意味をあとのア〜ケから選びましょう。

- ① 一日千秋                      ② 自業自得                      ③ 鶏□午後                      ④ 朝令暮改  
 ⑤ 竜頭蛇尾                      ⑥ 山紫水明                      ⑦ 青天白日                      ⑧ 四面楚歌  
 ⑨ 呉越同舟
- ア 始めは勢いさかんで、終わりはふるわない様子  
 イ 大きな団体の下っぱより、小さな団体の長である方がよい  
 ウ 自分でしたことの報いを受ける  
 エ 助けがなく、周囲には敵や反対者しかいないこと  
 オ 命令することが始終改められ、一定しないこと  
 カ 後ろぐらいいところがなく、世間に遠りよする必要があること  
 キ 山や川の景色が美しいこと  
 ク 仲の悪いものどうしが協力し合うこと  
 ケ 待ち遠しい

参考

鶏□午後

「鶏□となるも午後となるなかれ」の略。「鶏□」はにわとりのくち(くちばし)、「午後」は牛の尻(しり)のこと、前者が小さな団体のリーダー、後者が大きな団体の中で低い地位にある者のたとえです。

# 7

## 同音異義語・同訓異義語

### ○区別の難しい「同音異義語」十五選

#### 1 タイシヨウ

対象（行為の向けられる相手・目標）

対照（ちがいはっきりした様子） 対称（算数の線対称・点対称）

#### 2 カンシン

関心（興味） 感心（えらい・すばらしいと感じ入る）

歓心（人の心を喜ばせる） 寒心（ぞっとする）

#### 3 イギ

意義（意味） 異義（ちがった意味） 異議（他人とちがった意見）

#### 4 カイホウ

解放（とらわれていたものに自由を与える） 開放（広く人々が利用で

きるようにする) 快方(病気がよくなる)

## 5 キカン

機関(動力によって機械を運転するしくみ) 気管(人体の中の空気の通路) 器官(生物が生きていくための体のしくみ)

## 6 シジ

指示(さしず) 支持(賛成して援助する) 師事(弟子として教わる)

## 7 キカイ

機械(動力によって動くしくみ) 器械(実験・測定・体操競技などの目的のために作られた道具) 機会(きっかけ・チャンス)

## 8 イドウ

移動(場所を動かすこと) 異動(会社や役所の中で、役職や仕事を入れかえること) 異同(ちがっているか同じであるか)

## 9 ツイキユウ

追求(ほしいものをどこまでも追い求める) 追究(どこまでも研究する) 追及(責任などを問いただし、他人を追いつめる)

## 10 ホシヨウ



保証（まちがないとうけあう） 保障（危険や障害から守る）

11 ケントウ

見当（だいたいの見込み） 検討（よく調べ、考えてみる）

12 ヤセイ

野性（自然に備わった本能） 野生（動植物が野山で育ち生きること）

13 シュウシュウ

収集（集めること） 收拾（さわぎなどをしずめ、まとめること）

14 セイサン

精算（金銭などを細かく計算すること）

清算（過去のことさらにきまりをつけること） 成算（成功の見込み）

15 ショヨウ

所用（用事） 所要（必要なこと）

○区別の難しい「同訓異義語」十二選

1 オサメル

治める（国や地域に秩序をもたらす） 修める（学び習う）

納める (しまう・お金を<sup>はら</sup>払う) 収める (しまう・よい結果を得る)

## 2 ハカル

図る (〜しようとする) 量る (はかり・ますで重さや容積をはかる)

測る (物差しで長さ・深さ・面積をはかる)

計る (時間・数量をはかる)

## 3 ツトメル

努める (事をなしとげようと力をつくす) 勤める (仕える)

務める (役割を<sup>やくわり</sup>はたす)

## 4 ウツス

移す (別の場所に動かす)

映す (光のはたらきで、水・鏡・スクリーンに物の姿を<sup>すがた</sup>現し出す)

写す (写真をとる・写生する・字や文章をそのまま書きとる)

## 5 アラワス

現す (それまで見えていなかった物のすがたが見えるようになる)

表す (言葉・表情などで表現する) 著す (本を書いて出版する)

## 6 トトノエル

整える (きちんとした状態にする)

調える (必要なものを全てそろえる)

## 7 キク

効く (ききめがある) 利く (目・耳・鼻などが十分なはたらきをする)

## 8 ノゾム

望む (ながめる) 臨む (会議などに出席する・海などに面する)

## 9 タツ

断つ (さえぎる・切りはなす) 絶つ (なくす・終わりにする)

裁つ (はさみで布や紙を切りはなす) 経つ (時が過ぎる)

## 10 キワメル

極める (これ以上はないという状態になる) 究める (研究しつくす)

## 11 マジル

混じる (まじりあって区別のつかなくなる場合)

交じる (まじりあっても一つ一つのものの区別がつく場合)

## 12 ツグ

次ぐ (〜の次である) 継ぐ (つげつぐ) 接ぐ (つなぎあわせる)

1 次の各文の——線部を漢字に直しましょう。

- ① サイシンの注意をはらう
- ② 競技場はカンセイに包まれた
- ③ これは彼のカイシンの作だ
- ④ サイダイもらさず点検する
- ⑤ ごコウイに感謝します
- ⑥ アンケートにカイトウする
- ⑦ 父のサイゴをみとる
- ⑧ 亡き父のイシをつぎ、学者になる
- ⑨ 生命ホケンに入る
- ⑩ ショキの目的を達する
- ⑪ 壁画<sup>へきが</sup>をセイサクする
- ⑫ 芸術作品をソウゾウする

2 次の各文のカタカナの部分<sup>を</sup>漢字と送り<sup>が</sup>なに直しましょう。

- ① 前方不注意にヨル事故
- ② 友人に入会をススメル
- ③ 決勝戦にヤブレル
- ④ 新入社員をトル
- ⑤ 仏様に花をソナエル
- ⑥ たかし君を飼育委員にオス
- ⑦ 新しい職にツク
- ⑧ 本人にカワツテ説明する
- ⑨ おしゃか様の教えをトク
- ⑩ これはヤサシイ問題だ

# 8

## ことわざ・慣用句・故事成語

### ○ことわざ

「ことわざ」は、もともと「言葉の技」に由来するとされる、昔から言いならわされてきた短いひとまとまりの語句であり、生活の知恵、人生の教訓、人間の弱点などを、たとえなどを使い、巧みに言い表したものです。

### ○慣用句

「慣用」とは「使い慣れた」という意味で、「慣用句」とは、人々のあいだでいならわされて「きまり文句」となった言葉のことです。「鼻が高い」「耳が痛い」といった人体の一部を使ったものと、そうではないものに大別できます。

## ○ 故事成語

「故事成語」は、中国の古くからの言い伝え（故事）から生まれた言葉です。ことわざ・慣用句は数が多いので、授業や読書や日常会話で出会うたびに覚えていくのがよいですが、故事成語は数が限られるので、以下のものは覚えておきましょう。四字熟語として定着したものと、それ以外のものに大別できます。

## ○ 主要な「故事成語」十三選

- 1 四面楚歌（しめんそか） 楚の項羽が漢の劉邦の軍に囲まれ、深夜、四面の漢軍の中からしきりに楚の歌がわきおこるのを聞いて、楚の民は漢軍に降伏したのかと思ひ嘆いたという故事から、助けがなく、周囲を敵に囲まれて困まっていること。
- 2 温故知新（おんこちしん） 古いことの中に新しい価値を発見すること。
- 3 龍頭蛇尾（りゅうとうだび） はじめは龍の頭のように意気さかんだ

が、終わりに近づくとへビのしっぽのようにふるわなくなること。

4 付和雷同（ふわらいどう） しっかりした考えを持たず、人の意見にすぐ左右されること。

5 呉越同舟（ごえつどうしゅう） 戦争状態にあった呉の国と越の国の人でも、同じ船に乗り合わせて暴風雨にあえば、たがいに助け合うことになるといったとえ話から、仲の悪い者どうしが協力しあうこと。

6 朝三暮四（ちょうさんぼし） 猿さるにどんぐりを朝に三つ夕方に四つあげようとしたらおこったので、朝に四つ夕方に三つあげようと言ったら喜んだという故事から、人を口先でうまくだますこと。

7 五十歩百歩（ごじっぴゃっぽ） 五十歩逃にげた者が百歩逃にげた者を笑ったというたとえ話から、ともに大したことはない、本質的には同じだということ。

8 矛盾（むじゆん） どんな盾たても破ることができると、どんな矛ほこも防ごうとできる盾を売ろうとした商人が、「その矛でその盾を突ついたらどうなるか」と問われ、答えられなかったという故事から、前後のつじつまがあわないこと、また、ふたつのものが両立しないこと。

- 9 他山の石(たざんのいし) よその山から出た石でも、寶石(ほうせき)をみがくのに役立つというたとえ話から、どんなつまらない他人の言動も、自分の人格を育てる助けになるといふこと。
- 10 蛍雪の功(けいせつのかう) 貧乏(びんぼう)で灯火(とうわ)の油が買えないため、蛍(ほたる)の光を集めて勉強したり、窓辺(まどべ)の雪明かりで読書をした人物がいたという故事から、苦勞しながら学問をし、成果をおさめること。
- 11 蛇足(だそく) 酒を賭(か)け、蛇(へび)の絵をやく描き上げる競争をしたところ、早くできた者が得意になり、不必要な足までつけたため、酒をもらいそこねたという故事から、余計なつけたしのこと。
- 12 杞憂(きゆう) 昔、杞の国の人々が、天地がくずれ落ちることをおそれ、夜もおちおち眠(ねむ)れなかったという故事から、いらぬ心配、とりこし苦勞のこと。
- 13 鶏口(けいこう)となるも牛後(ぎゅうご)となるなかれ 小さな団体のリーダーになる方が、大きな団体の中で人に従(したが)っているよりもよ

いことだ。



1 次の（ ）にあてはまる言葉を入れ、慣用句を完成させましょう。ただし、①～⑮は人体の一部分、⑯～⑳は人体以外のものが入ります。ただ

- ① ( ) をなでおろす 〓 ほっと安心する。
- ② ( ) が低い 〓 他人に対してへりくだった態度をとる。
- ③ ( ) を長くする 〓 待ちこがれる。
- ④ ( ) が下がる 〓 感心して自然にうやまう気持ちになる。
- ⑤ ( ) が折れる 〓 困難てんなんである。努力を要する。
- ⑥ ( ) をくわえる 〓 何もせず、ただうらやましがっている。
- ⑦ ( ) が鳴る 〓 自分の実力を見せたがって張り切る様子。
- ⑧ ( ) に手を置く 〓 よく考えてみる。
- ⑨ ( ) を冷やす 〓 ひやひやする。おどろき、おそれる。
- ⑩ ( ) に火をともし 〓 けんやくした生活をおくる。
- ⑪ 人を ( ) で使う 〓 いばった態度で人に指図する。

- ⑫ ( ) で茶をわかず 〓 おかしくてたまらないこと。
- ⑬ ( ) を出す 〓 つかれきる。
- ⑭ ( ) をおしむ 〓 労苦をきらって仕事をなまける。
- ⑮ ( ) をかじる 〓 独立できないで、親に養われている。
- ⑯ ( ) に水 〓 いくら努力してもききめがない。
- ⑰ ( ) 車を押す 〓 無理を押し通す。
- ⑱ ( ) が知らせる 〓 なんとなく予感がする。
- ⑲ ( ) を持たせる 〓 勝利や手柄てがらを相手にゆずる。
- ⑳ 身を ( ) にする 〓 苦勞をいとわず、けんめいに働く。
- ㉑ ( ) にかける 〓 自らめんどろを見て大事に育てる。
- ㉒ ( ) を食う 〓 あわてる。
- ㉓ ( ) 置く 〓 相手を自分よりすぐれた人として尊敬そんけいする。
- ㉔ ( ) をかみつぶしたよう 〓 不愉快ふゆがいそうな顔つき。
- ㉕ ( ) を割わったよう 〓 物事にこだわらないさっぱりした性格。
- ㉖ ( ) の持ちぐされ 〓 すぐれた物や才能を活用しないことのとたとえ。
- ㉗ ( ) が合う 〓 気が合う。

⑳ ( ) のともし火 ㊦ 今にも終わりになりそうな様子。

㉑ けがの ( ) ㊦ 誤あやってしたことが、思いがけなくよい結果をもたらす。

㉒ 渡りに ( ) ㊦ 困てまっているときに、都合のよい条件が与あたえられる。

## 2 次のことわざ・故事成語の意味をあとのアーンから選びましょう。

① 朱しゆにまじわれれば赤くなる

② 灯台とうだい下暗し

③ 長いものには巻まかれる

④ 雨降あめふって地固まる

⑤ 案あんずるより産むがやすし

⑥ 情なさけは人のためならず

⑦ 紺屋こんやの白袴しろはかま

⑧ とりの花はあかい

⑨ 船頭多くして船山にのぼる

⑩ 雨だれ石をうがつ

⑪ 五十歩百歩

⑫ 他山の石

⑬ 四面楚歌そか

⑭ 矛盾むじもん

⑮ 蛇定だそく

ア もめごとの起こったあとは、かえって安定し、物事がうまくいく。

イ 他人のためにいそがしくしていて、自分のことをするひまがない。

### 参考

情なさけは人のためならず  
「情なさけをかけると当とう一人のためにならない」と解かい釈しゃくするのはまちがいですので、注意ちゅういしましょう。

ウ 少しのちがいで、大差のないこと。

エ 余計なつけたし。

オ 人はつきあう友達の影響えいきょうでよくなったり悪くなったりする。

カ 他人のつまらない言行でも、自分の才能や人格をみがくための反省の材料とすることができる。

キ 物事はいざ実行してみると、案外うまくいくものである。

ク 根気よく努力すれば、どんなことでもなしとげられる。

ケ 力のあるものにはさからわず、したがっておいた方が得である。

コ 他人のものは何でもよくみえる。

サ 指図する人が多いと物事にまとまりがつかず、おかしいことになる。

シ 自分のこと、身近なことにはかえって気が付かない。

ス 前後のつじつまがあわないこと。

セ 他人に親切にすると、いつかは自分によいむくいがかえってくる。

ソ 助けがなく、周囲が敵てみや反対者ばかりである。

# 9

## 文・文型・文の組み立て・主語と述語・ 修飾語と被修飾語

### ○文・文型・文の組み立て

(1) 句点の次から句点までの言葉の「まとまりを文」という。

(2) 文は述語のタイプのちがいから二つの文型に分けることができる。

A 何が—どうする (例) 車が走る。父は茶の間にいる。彼は笑わな  
い。

B 何が—どんなだ (例) 紅葉が美しい。海がおだやかだ。

C 何が—なんだ (例) 私は中学生だ。君に足りないのは努力だ。

(3) 文は組み立てのちがいから次の三種類に分けることができる。

A 単文 一組の主語・述語をふくむ文。

(例) 今年は寒い年です。彼は席を立った。

**B 重文** 二組以上の主語・述語をふくみ、これらの主語・述語が互たがに対等の関係にあるもの。

(例) 兄は今年高校生で、弟はやっと中学生です。

**C 複文** 二組以上の主語・述語をふくみ、文の中心になる主語・述語と、そうでない主語・述語に分かれるもの。

(例) 北風が冷たく吹く冬がとうとう始まった。

### ○主語・述語の識別

文の主語と述語を見つける問題は、文法問題の基本中の基本です。ただ、「は・が・も・こそ」が付いているものが主語」と機械的に対処してしまつと、例えば「そうじは／私／やります。」「と／つ／文で、」「そうじは」が主語だとまちがえかねません。この文の主語は「私」です。

そこで、主語と述語を見つける問題は、次のように対処します。

(1) **必ず述語から探す**。ほとんどの場合、述語は文末にあります。例外

### 参考

#### 複文の主語・述語

複文が出題され、主語・述語を問われた場合は、中心となる主語・述語のみを答えます(複文の中の、複数の主語・述語を答えさせる問題であれば、必ず、そのことが明記されます)。上記の例文の主語・述語が問われた場合、主語は「冬が」、述語は「始まった」と答えます。

は、文が倒置とうちされている場合と、述語が省略されている場合です。

● 倒置の例 元気になったよ、けがをしていたシロが。

● 述語の省略の例 ねえ、玄関げんかんにお客様が… (いるよ)。

(2) 述語を見つけたら、その述語に「何が」「誰が」をつけてみる。この

「何が」「誰が」にあたるものを文中から探せば、主語が見つかります。

(3) 見つけたものが本当に主語であるかどうかを確かめる。「は・が・

も・こそがつけば主語」という法則をここで使います。見つけたものに「は・が・も・こそ」をつけてみて、文の意味に大きな変化がなければ、それが文の主語であると確認かくにんできます。

(4) 主語―述語は文節の働き (文の成分) の名称めいしやうであるから、答えると

きは原則として一文節でぬき出す。

#### 参考

主語・述語は一文節？

主語も述語も基本的には一文節ですが、意味の弱い形式名詞(こと・もの・わけ・ところ・つもり・ため・ひと、など)は単独たんどくでは主語になれないし、意味の弱い補助動詞(ある・いる・くる・みる・おく・く・くれる・もらう、など)は単独では述語にならない、という考え方があります。この考え方だと、主語・述語が二文節以上になるケースがあることになります。本書はこの考え方に従したがい、例えば「おいしいものが待っていた」の主語は「おいしいもの」が、「述語は

## ○文型の識別

文型の識別は、述語にふくまれる品詞ひんしのちがいに注目して行くと、まちがいがなくなります。

A 「何が—どうする」型の文は、動詞が述語にくる。

B 「何が—どんなだ」型の文は、形容詞か形容動詞が述語にくる。

C 「何が—何だ」型の文は、名詞＋断定の助動詞「だ」「です」が述語にくる。

したがって、文型を識別するためには、「動詞」「形容詞」「形容動詞」「名詞＋断定の助動詞」の区別ができればよいこととなります。

これらの品詞の区別の仕方は、

●動詞は言いきりの形が「う段」で終わる。

●形容詞は言いきりの形が「い」で終わる。

●形容動詞は言いきりの形が「だ」で終わり、この「だ」を「な」に言

「待って／いた」で、それぞれ二文節ですが、これで正解としています。中学校ではこの問題を解決するため、二文節以上の主語を「主部」、二文節以上の述語を「述部」と呼びますが、小学校では「主部・述部」は使いません。気になるようでしたら、学校や塾じゆくの先生に「形式名詞は単独で主語に、補助動詞は単独で述語になると考えますか？」と質問してみてください。



いかなることができる。

● **名詞＋断定の助動詞「だ」** は、形容動詞とまちがえないことが大切。  
区別するポイントは二つ。

(1) 名詞は、「は・が」をつけると文の主語になる。

(2) 断定の助動詞「だ」は、形容動詞とはちがって、「な」に言いかえられない。

### ○ **単文・重文・複文の識別**

次の各文は、単文・重文・複文のどれにあたるでしょうか。

ア 彼は、／まるで／オオカミのように／するどい／目つきで、／私を／にらんだ。

イ 健太は／しばかりに／いき、／花代は／洗<sup>せん</sup>たくに／いく。

ウ 兄が／貸して／くれた／本を／私は／むさぼるように／読んだ。

解法1 文末の述語に対応する主語を探す。

アの「にらんだ」に対応する主語は「彼は」です。イ「いく」の主語は「花代は」、ウ「読んだ」の主語は「私は」です。

**解法2** 1で見つけた以外に主語・述語の関係になっている文節がないかどうかを探す。

アは「彼は」「にらんだ」以外に主語・述語はありませんので、アは単文です。イでは、「花代は」「いく」以外に「健太は」「いき」が主語・述語になっています。ウでは「私は」「読んだ」以外に「兄が」「貸して／＼れた」が主語・述語になっています。

**解法3** 主語・述語が二組以上ある文が、重文か複文か考える。

重文は、二つの文に分けることができ、しかもこの二つの部分の前後を入れかえても意味が変わりません。複文は、二文に分けたり前後を入れかえたりすると、意味が変わってしまいます。

イは「健太はしばかりにいく。」「花代は洗たくにいく。」と二文に分けることができますし、前後をいれかえて「花代は洗たくにいき、健太はし

ばかりいく。」としても、文の意味は変わりません。これは二つの主語・述語が対等なため、このことは重文の特徴とくちょうとなっています。したがって**イは重文**です。これに対してウは「兄が」「貸してくれた」がひとまとまりとなって、直後の「本」を修飾しゆしょくしているため、一文に分けることも、前後をいれかえることもできません。したがって**ウは複文**です。

### 注意 1 複文に出てくる「の」に注意!

工 洋二の／見た／かげは／おやしきに／住む／少女の／姿すがただった。

この文では「かげは」「姿だった」の他に「洋二の」「見た」も主語・述語の関係になっています。一文に分けることも、前後の入れかえもできないため、複文です。

複文では「は・が・も・こそ」の他に「の」が主語を表すことがあります。このような「の」は、「が」に言いかえることができるので、見分けることは難むずかしくありません。なお単文や重文では、「の」が主語を表すことはありません。

## 注意2 複文には様々なパターンがある！

次のオクは全て複文です。主語・述語が二組あり、意味を変えずに二文に分けたり、前後を入れかえたりできないことを、確認して下さい。

オ 彼が／落とした／財布が／見つかった。

カ 犬たちは／シカの／残していく／においを／すぐ／かぎつける。

キ 三十八度の／熱が／あったが、／広志は／ゲームを／続けた。

ク 洋二が／耳を／すますと、／確かに／歌声が／聞こえた。

## ○修飾・被修飾の識別

(例) 昨日、／ぼくは／父と／裏の／せまい／空き地で／たいへん／  
楽しく／キャッチボールを／した。

この文の「昨日」「父と」「空き地で」「楽しく」「キャッチボールを」は、「した」に關つて、「いつ」「誰が」「いつか」「どんなふうか」「何を」したのか説明しています。

また「裏の」「せまい」は、「空き地で」に關つて、「いつの」「どんな」空き地なのかを説明しています。「たいへん」は、「楽しく」に關して、

「どれくらゐ」楽しかったのかを説明しています。

このとき、説明する文節（傍線部）を「修飾語」、説明される文節（傍点部）を「被修飾語」といいます。

「昨日」「父と」「した」を修飾）や「たいへん」「楽しく」を修飾）のように、用言（動詞・形容詞・形容動詞）を修飾するものは「連用修飾語」といいます。

「裏の」「せまじ」「空き地で」を修飾）のように、体言（名詞）を修飾するのは「連体修飾語」といいます。

1 次の各文の主語と述語の関係は、ア「何が—どうする」、イ「何が—どんなだ」、ウ「何が—何だ」のどれにあたりますか。

- ① 守と／弟の／かたわらで、／風に／なぶられた／コスモスが／  
ゆるる。
- ② 依頼人を／無事に／町まで／送り届ける／ことが／君の／役目だ。
- ③ 夜の／校舎の／静まりかえった／様子は／なんとも／不気味だ。

2 次の各文は、ア「単文」、イ「重文」、ウ「複文」のうちどれにあたりますか。

- ① 父は／自分の／部屋に／こもり、／母は／買い物に／でかけた。
- ② 男が／生まれた／家は、／鎌倉の／海の／そばに／あった。
- ③ その／日の／真夜中、／洋二は／そろりそろりと／階段を／のぼった。
- ④ みちこが／家に／帰ると、／玄関に／見慣れない／男物の／靴が／ならんで／いた。

参考

単文・重文・複文の識別

述語に着目します。述語が一つしかない文は、単文です。述語が複数くまれている文は、重文か複文ですが、二組以上の主語・述語の関係が対等である重文は、すぐに識別できるでしょうから、それ以外はすべて複文ということになります。

# 10

## 品詞分類

### ○文節と単語／品詞／自立語と付属語

1 意味や発音が不自然にならない程度に、文を短く区切ったものを、**文節**といいます。小さな子供がやるように、「……ネ……ネ」と文中に「ネ」をさんでみて不自然でないところが文節の切れ目です。文法的に正確に定義するなら、「**一文節＝一つの自立語（＋一つの以上の付属語）**」となります。

(例) いつも笑わないあの人が、腹をかかえて笑った。

↓いつもネ／笑わないネ／あのネ／人がネ／腹をネ／かかえて  
ネ／笑ったヨ。

### 文節の識別

「ネ」をはさむやりかたで、あらゆる文節を正確に識別するのは限界がありますので、ある程度品詞分類ができるようになったら、「一つの自立語（＋一つの以上の付属語）」で識別するようにして下さい。言い換えれば、「一つの文節には、二つ以上の自立語は入らない」ということです。

### 参考

2 文節をその働きにしたがって分類したものを**文の成分**といいます。文の成分には、**主語・述語・修飾語・接続語・独立語**があります。

3 文節をさらに細かく区切った、「言葉の最小単位」を**単語**といいます。

(例) いつも ネ 笑わ ない ネ あの ネ 人 が ネ 腹 を ネ か  
え て ネ 笑 つ た ヨ。(／は単語の切れ目、傍線は文節、ネは文節の切れ目。)

4 単語をその性質によって分類したものを**品詞**といい、十種類あります。十品詞中、単独で文節をつくることができるものを**自立語**、単独で文節をつくれず、自立語の後ろに続けて用いるものを**付属語**といいます。

自立語……名詞・動詞・形容詞・形容動詞・連体詞・副詞・接続詞・

感動詞

付属語……助詞・助動詞



品詞の働きは、十品詞を五つのグループに分けて覚えましょう。

## ●第一グループ 主語の文節を作る自立語……名詞

活用のない自立語で、「は・が」をつけると主語になるのが体言たいげんです。品詞でいうと名詞がこれにあたります。

**普通名詞**…一般いっぱんの物の名前を表す（海・国・人間・本・野球・犬）

**固有名詞**…地名・人名など特定のものを表す（太平洋・イギリス・宮沢賢治・『注文の多い料理店』・ポチ）

**数詞**…数・量・順序を表す（二人・五頭・百枚まい・第一号・いくつ）

**形式名詞**…形は名詞だが、もとの意味が薄うすい（こと・もの・ため）

**代名詞**…他の名詞のかわりに用いられる（これ・それ・あれ・どれ）

## ●第二グループ 述語の文節を作る自立語…動詞・形容詞・形容動詞

活用がある自立語で、単独でも述語をつくることができるものを用言ようげんと  
いいます。品詞でいうと動詞・形容詞・形容動詞がこれにあたります。

**動詞**…動作・状態・存在を表し、言いきりの形がウ段で終わる

**形容詞**…性質や状態を表し、言いきりの形が「い」で終わる

**形容動詞**…性質や状態を表し、言いきりの形が「だ」で終わる

### ●第三グループ 修飾語の文節を作る自立語：連体詞・副詞

連体詞と副詞の識別は、小学生にとってつまずきの石となるところなので、よく出るものはそのまま覚えてしまいましょう。

**連体詞**…活用のない自立語で、体言（名詞）を修飾する文節をつくる。

(例) この・その・あの・どの・大きな・小さな・おかしな・

あらゆる・ある・ばかげた・たいした

**副詞**…活用のない自立語で、主に用言を修飾する文節をつくる。

A 「状態の副詞」は「どのように」を表す。擬声語・擬態語は全て状態の副詞に分類される。

(例) ゆっくりと(歩く)・こっそりと(話す)・はっきり(聞く)

たらたら (流れる)・ひらひらと (散る)・のろのろ (歩く)

**B 「程度の副詞」** は「どれくらいか」を表す。

【例】とこも (小さい)・かなり (大きい)・少し (足りない)

もっと (ほしい)・ずっと (よい)・きわめて (難しい)

**C 「呼応の副詞」** の後には必ず決まった言葉が来る。

【例】全く (～ない)・けっして (～ない)・まるで (～ようだ)

もし (～なら)・たとえ (～ても)・なぜ (～か)

たぶん (～だらう)・きっと (～だらう)・まさか (～あるまい)

**注意 A 連体詞と副詞は、修飾する語句で見分ける！**

例題：次の中から連体詞を一つ選びましょう。残りは全て副詞です。

ア のんびり イ ずいぶん ウ たいした エ なかなか

連体詞と副詞を見分けるには、修飾する語句を考えます。アは「過ぎす」(動詞)、イは「遅い」(形容詞)、エは「りっぱだ」(形容動詞)などの用言を修飾するから、全て副詞です。ウは「ものだ」「量ではない」など体言(名詞)を修飾するから、連体詞です。

参考

「ゆっこ」と「ゆっこじ」

「ゆっこ」と同じへ、

「ゆっこじ」も、単語

の副詞と考えます(副詞

「ゆっこ」+助詞「じ」

とは考えませぬ。「じ」

こそ「じこそじ」「まっ

きり」「まきり」「わら

わら」「わらわらい」「わら

らひら」「ひらひらい」「の

ろのろ」「のろのろ」も

同様で、いずれも「単語の副詞」です。

**注意B 修飾語の文節を作る形容詞や形容動詞にまどわされないこと！**

例題…次の傍線部の中から、連体詞と副詞を一つずつ選びましょう。

ア あたたかい日だ。      イ みごとな桜だ。      ウ この人だ。

エ 弟の本だ。      オ つらくなる。      カ 不思議に思う。

キ すつきりする。      ク 大人になる。

ア～エは体言を修飾しています。アは言いきりの形が「あたたかい」で形容詞、イは「みごとだ」で形容動詞、エは名詞「弟」＋助詞「の」。「体言を修飾する活用のない自立語」という連体詞の条件を満たすのはウ。

オ～クは用言を修飾しています。オは言いきりの形が「つらい」で形容詞、カは「不思議だ」で形容動詞、クは名詞「大人」＋助詞「に」。「用言を修飾する活用のない自立語」という副詞の条件を満たすのはキ。

**注意C 「これ」は代名詞、「この」は連体詞！**

「このあめび言葉」の中で、「これ・それ・あれ・どれ」「この・その・あ  
そい・どこ」は「は」「が」をつけると文の主語となるから、名詞（代名

詞)です。「この・その・あの・どの」は体言を修飾するから(この家、その人…)、連体詞です。

### 注意D 「大きな」「小さな」は形容詞でも形容動詞でもなく連体詞!

例題…次のア～エの中で性質の異なるもの(こと)を一つずつ選びましょう。

- 1 ア 不思議な    イ 大きな    ウ スマートな    エ きれいな
- 2 ア 少ない    イ 多い    ウ 小さな    エ 大きい

1のア・ウ・エは言いきりの形が「不思議だ」「スマートだ」「きれい  
だ」となり形容動詞ですが、イは「大きだ」となっています。

2のア・イ・エはみな形容詞です。ではウの「小さな」はどうでしょう。形容詞「小さい」を活用させると、「小さかる(う)・小さかつ(た)・小さく(なる)・小さい(。)(。・小さい(もの)・小さけれ(ば)」となり、形容詞の活用形の中に「〜な」となるものはありません。

正解は1がイ、2がウです。「大きな」「小さな」は形容詞「大きい」「小さい」の活用形ではないのですね。それらは活用がなく、体言の修飾にのみ用いられる、連体詞なのです。

### 参考

#### 外来語の形容動詞

外来語は名詞だけでなく、「スマートだ」のように、形容動詞にも多く存在します。名詞+「だ」なのか、形容動詞なのか、識別が難しそうですが、対応は原則通りです。例えば「あの服装はカジュアルだ。」の傍線部(ぼうせんぶ)の品詞分類が問われた場合、(1)「〜は・が」をつけて主語になるなら名詞、(2)「だ」を「な」に言い換えられれば形容動詞です。(1)「カジュアルは〜」という言い方が成り立たず、(2)「カジュアルな服装」と「な」への言い換えができますから、

● 第四グループ 接続語・独立語の文節を作る自立語…接続詞・感動詞

接続詞…活用しない自立語で、接続語の文節をつくる。

(例) しかし・だが・けれども (逆接)

だから・それで・すると (順接) また (並立)

そして・しかも (添加) つまり・すなわち (換言)

あるいは・または (選択) むしろ (対比) なぜなら (説明)

ただし (補足) たとえば (例示)

ところで・では・さて (転換)

感動詞…活用しない自立語で、独立語の文節をつくる。

(例) まあ (感動) ねえ (呼びかけ) はい (応答)

こんにちは (あいさつ)

● 第五グループ 付属語…助動詞・助詞

付属語の中で、活用するのが助動詞、活用しないのが助詞です。

答えは「カジュアルだ」という形容動詞です。ちなみに、「カジュアル」は「ふだんの、くだけた」という意味で、反対語は「公式の、格式ばった」という意味の「フォーマル」です。

**主な助動詞** (一) 内は助動詞が表す意味

れる・られる (受け身など) らしい (推定) そうだ (伝聞・様態)  
ようだ (不確かな断定など) だ・です (断定) た・だ (過去など)  
ない (打ち消し) う・よう (意志・推量) ます (丁寧)

**主な助詞** 助詞は四種類に分類されます。助詞の種類の違いは、くわしくは中学校で学習します。今は、大まかなイメージを持ってもらえれば良いでしょう。

**格助詞**…主に体言につき、後の語句との関係を示す。

(例) 本を読む。バスに乗る。部屋から出る。花より団子。父や母  
学校へ行く。〜と言う。ぼくの物。桜が咲く。筆で書く。

**接続助詞**…用言や助動詞につき、前後のつながりを示す。

(例) 訪ねたが会えない。急いだけれど間に合わない。  
難しいのにできる。くさってもたい。雨が降るので中止する。

雨が降るから中止する。雨が降れば中止する。雨が降ってくる。  
明日になるとわかる。

**副助詞**…強調したり限定したり、なんらかの意味をつけ加える。

(例) 明日にはみできる。君もやるか。君の方こそ悪い。

親さえ見捨てた。君まで笑うのか。私しか知らない。

君だけ残った。一月ほどかかる。

**終助詞**…文末につき、疑問・感動・禁止など話し手の態度を示す。

(例) なぜ泣くのか。誰のものかしら。きれいな花だな。

ごみを捨てるな。りっぱですね。これはすごいで。

誰も知らないの。大丈夫だとも。

**注意 A 助動詞と助詞は文が終わるかどうかで区別 終助詞は例外!**

助動詞と助詞の一番のちがいは活用の有無ですが、まだ助動詞の活用をくわしく学習していない小学生には、識別の決め手にはしづらいですね。



そこで、助動詞で文を終えることはできるが、終助詞をのぞく助詞では文は終わらないことに注目します。したがって、主要な終助詞を頭に入れ(特徴的だし数も少ない)、助動詞と混同しないようにしておけばよいでしょう。

**注意 B** 接続詞と接続助詞は自立語か付属語かで区別する！

ア 確かに／弟は／ひどい／ことを／する。／けれど／悪気は／  
ないのです。

イ 確かに／弟は／ひどい／ことを／するけれど、／悪気は／  
ないのです。

アとイの「けれど」はどちらも「逆接」の関係を表しますが、品詞が異なります。アは自立語で、単独で接続語の文節をつくる接続詞です。イは「する」という自立語(動詞)の後につくく付属語で、接続助詞です。

1 次の文の——線部①～⑳の品詞名をあとのア～オから選びましょう。同じ記号を何度使ってもかまいません。

① あれはいつのことだったか。ある日②にぎやかな町中③でいわゆる「竹馬の友④」にばったり出会った。とてもなつかしく思ったので、大きな声で呼びかけたが、こちらは昔とはすっかり変わってずいぶん太っていたし、着ている物もはで⑪になっているので、相手はなかなか気が付かず、きよる⑫と見回すばかり。急な⑬ことにおどろいたときの、まるでハトが豆鉄砲⑭を食った⑮ような様子は、あのころと全く⑯変わらない。おかしなものだと⑰しみじみ⑱思った。近くの酒場に入り、ゆっくりと⑲飲み交わした。

- ア 代名詞      イ 形容詞      ウ 形容動詞  
エ 連体詞      オ 副詞

## 14

## 文学史

## ○前近代の文学

わたし達の祖先が文字を持つようになったのは、中国から漢字が伝えられたことが始まりです。漢字を用いて日本語を記録することができるようになると、朝廷てうていを中心に、神話・歴史・地理などの記録や、優れた和歌・漢詩を、後世に残すこととなりました。

また平安時代には、漢字をもとに「かな」が発明されました。この「かな」によって物語や日記や随筆ずいひつが書かれ、日本の文学は宮廷きやうていの女性たちを中心に、さらに大きく花開くことになりました。

このように、奈良時代から江戸時代えどの終わりまでに書かれ、歴史的な評価が定まった作品群を、「古典」と言います。古典は、平安時代に形が整った書き言葉で書かれているため、難しく感じるかもしれませんが、こ

## 参考

## 古典

近代文学の名作を「古典」にふくめることもありま  
す。ただ、それらが本  
当に「古典」の名に値する  
かどうかは、後世こうせいの人々  
の判断にゆだねるしかあ  
りません。

の列島で生きた人々の物の感じ方、考え方、暮らしぶりを、今に伝えま  
す。以下、覚えておきたい古典作品を紹介します。

## ① 奈良時代

● **古事記** 大國主神の話（因幡の白うさぎ）や、海幸彦・山幸彦の話が  
のっている、日本最古の歴史書です。太安万侶が編さんしました。

● **日本書紀** 舎人親王が編さんした歴史書です。「古事記」と「日本書紀」  
をあわせて「記紀」といいます。

● **万葉集** 現存する最古の和歌集です。漢字の音を用いた「万葉仮名」  
で書かれています。主な歌人としては、柿本人麻呂、山上憶良、大  
伴家持らの名前を覚えておきましょう。

銀も金も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも

山上憶良

## ② 平安時代

● **竹取物語** かな文字で書かれた、現存する日本最古の物語で、「かぐや

### 参考

銀も金も玉も何せむに勝  
れる宝子にしかめやも

現代語訳「銀も金も寶石  
も、どうしてすぐれた宝  
である子どもにおよぶだ  
ろうか。いや、およびは  
しない。」万葉集におけ  
る山上憶良の「子等を思  
う歌」です。

姫」として知られています。

原文冒頭「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうてゐたり。」

現代語訳「今はもう昔のこと、竹取の翁（おじいさん）という人がいた。野山に分け入って竹を取っては、色々なことに使っていた。名前は『さぬきのみやつこ』といった。（あるとき）その竹の中に、根元が光っている竹が一本あった。不思議に思っ近づいて見ると、筒の中が光っていた。それを見ると、三寸（約九センチ）ほどの人が、とてもかわいらしい姿で座っていた。」

●古今和歌集 かな文字で書かれた最初の勅撰和歌集（天皇の命で編さんされた和歌集のこと）で、紀貫之・小野小町・在原業平らが代表的

な歌人です。優美な歌は、古今調といわれます。

● **土佐日記** かな文字で書かれた最初の日記で、女性が書いたという形をとっています。作者は**紀貫之**という男性です。

● **枕草子** 作者は**清少納言**。宮廷生活における人物批評や、自然観察は、女性らしい細やかさと、鋭い才気にあふれ、後世の随筆文学に大きく影響を与えました。

原文冒頭「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。」  
現代語訳「春は明け方がいい。だんだん白くなっていく山の稜線のあたりの空が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている(のがいい)。」

● **源氏物語** 作者は**紫式部**。五十四帖からなる長編の物語で、「ものあはれ」といわれる平安時代の貴族の感じ方や考え方が、「光源氏」という主人公を通して美しい文章で語られています。清少納言と紫式部は

## 参考

### 帖

「源氏物語五十四帖」はよく聞く言い回しですが、この「帖」とは、「折本」を数える単位です。「折本」とは、紙を横に長くつないで折りたたんだ本のことで、「源氏物語」は、書写された「折本」の形で広まりましたので（もちろん平安時代に印刷技術はありません）、「帖」で数えます。ちなみに、軸に紙を巻きつける「巻物」を数える単位が「巻」です。「帖」はすたれてしまいましたが、「巻」は今でも使いますね。

同じ時期に宮廷生活を送り、共に、偉大な文学を生んだ女性です。

● **今昔物語** いましやくものがたり インド・中国・日本の説話（人々の間で語り伝えられてきたお話）を一千余り集めた最大の説話集で、大正時代の作家、芥川竜之介は、この中の話を題材に短編小説を書きました。

平安時代はこのほか『伊勢物語』や『大鏡』などがあります。それらには必ずと言っていいほど、和歌が出てきます。和歌は、日本の文芸の中心に位置する表現形式であると言えます。

### ③ 鎌倉時代 かまくら

鎌倉時代と室町時代を歴史上の分類で、中世と言い習わしています。中世は、政治や文化の中心が、京都の宮廷貴族（公家）から武士と僧侶に移動した時代です。兼好法師らは、武士の社会から身を引いて出家した知識人でした。このため、仏教の影響が文学に大きくあらわれたのが、中世の特徴と言えます。

● **方丈記** ほうじょうき 作者は鴨長明です。鎌倉時代の初めに書かれた随筆で、火